

〈翻 訳〉

ジョアシャン・デュ・ベレー

『哀 惜 詩 集』(2)

田 中 聰 子

ソ ネ 22

今ミューズを愛することはかつてないほど好ましい。
フランス語で書こうと、またローマの言葉で書こうと。
それというのも、かくも人間性豊かな君主の御意向で、
かくも大きな恵みが文芸に与えられたためだ。

この上は君の精神が愉悦を覚える^{まよ}聖き生業は
もはや空しい労苦とはならぬだろう。
また君の手が約束しながら一向渉らぬあの仕事⁽¹⁾は
今後はもはやフランスキユスにどんな言訳もできぬだろう。

一方は私は(わがロンサールよ)この苦悩をまぎらすために、
決して富を得るためでなく、ついて行こう、できるなら、
君の疲れたミューズが歌う最もささやかな歌の後を。

つまりは誰もがこの幸運に値いしたわけではなかったのだ。
君がその例となったように、気前よい国王の御志が
楽弓を金色に染め豎琴に笏杖を添える⁽²⁾ 幸運に。

註

- (1) ロンサールが1550年頃からプランを発表して人々の期待を集めていたフランス建国の叙事詩『フランシヤード』への言及。ロンサールはこの長期を要する仕事に必要な物質上の援助を国王に期待したが、なかなか得られぬことを理由にこの仕事に取りかかろうとしなかった。
- (2) Sa lyre crossee. 1555年の『雑詠集』の冒頭の『豎琴へ』という詩の中でロ

ンサールは国王に対する露骨な要求を行なっている。即ち「ではさようなら、哀れなフランキユスよ、／汝の栄光は永遠に、打ち破られた汝の〔トロイアの〕城壁の中にひそんだままとなろう、／汝がその子孫のわが国王に、／汝のほまれのために私の豎琴を笏杖のように曲げよといわないかぎりは。」（ローモニエ版六巻 134頁。高田勇氏訳）と彼は歌っている。この最後の行をデュ・ベレーはこのソネに引いているのである。《crossee》という語について、E. ユゲは《recompenser de crosse (d'abbay)》即ち「笏杖（僧院）を以て報いる」という解釈を与えている。僧院長の職禄をというこのロンサールの要求はなかなか実現されなかった。デュ・ベレーはすぐにも実現されると信じたようであるが。

ソネ 23

読ませてはもらえぬのか、あの苛酷な神⁽¹⁾ 以外には。
 読ませてはもらえぬのか、イダリアの女神⁽²⁾ 以外には。
 キュプロスの女神⁽³⁾ ぬきではマルスを見ることもできず、
 恋するロンサールのほかには見ることもできぬのか。

相も変わらず倦むことのない手で織り直すのか、
 かくも長い苦悩の種であるあの織物⁽⁴⁾ を。
 相も変わらずオレステスを舞台の上に眺めるのか。
 相も変わらずオルランド⁽⁵⁾ は愛ゆえに狂っているのか。

一方君のフランキユスは空しく帆を上げ、
 舵を真っ直に取り星の動きを窺っている。
 将来錨を下すべき場所に向かって発つために⁽⁶⁾。

風やよし、船の用意もすべて調った。
 ところが今だに彼はトロイアの岸边にある。
 だから私は思う（ロンサールよ）彼は決して発ちはすまいと⁽⁷⁾。

註

- (1) アモル。(2), (3) ウエヌス。
- (4) 次の慣用句が基になっている。《Penelopae telam retexens》
- (5) 十六世紀のイタリア詩人アリオストの騎士道叙事詩『狂えるオルランド』の主人公。この作品は十六世紀のベストセラーである。
- (6) ヘクトールの子フランキユス（アステュアナクス）はトロイア滅亡の折ユピテル

に一命を救われ、後フランスに来て建国の祖となる。当時広まっていたこの伝説が『フランシヤード』の素材となっている。

- (7) ロンサールは1555年の『続恋愛詩集』の中で、デュ・ベレーに呼びかけて次のように歌っている。「君はマニーに言うだろう、この詩を読みながら。／何と、ロンサールはいまだに恋をしているのかと。／わがベレーよ、その通り、またそうありたいと望んでもいる。」(ローモニエ版七巻118頁) このロンサールのソネは次のようなカトランで始まっており、『哀惜詩集』のソネ10への言及となっている。「君がトスカナの流れのそそり立つ岸辺を、／またパラティヌスの丘を眺めているその間、／そして君の母国語を異国の言葉と取り替えて／ラテンの気風が君にラテン語を語らせているその間」デュ・ベレーがローマ滞在中のソネをまとめて『哀惜詩集』の名の下に発刊した年(1558年)に先立って、すでに幾つかのソネがロンサールの目にふれていたことをこれは示している。

ソネ 24

君は幸せだ (バイフ⁽¹⁾ よ) 幸せな上にも幸せだ。
定めなき輪を廻らせて我らを持ち上げては突き落す
あの盲目の女神⁽²⁾ に惑わされついで行く代りに、
我らを恋に落とすあの盲目の子供⁽³⁾ についていくとは。

君は味わうこともない (バイフよ) 苛酷な主人の
厳しい厳格さを。その代りに美しく優雅な
生れも高い貴婦人の優しいつれなさが
君の心を優しく悩ませ苦しめる⁽⁴⁾。

一方哀れなこの私は陛下の御目から遠く離れ、
異国で不幸のうちに老いていく。

貧しさを逃れて。だが、ああ、逃れられぬ、

哀惜を、悲嘆を、苦悩を、そして苦痛を、
空しい希望への遅すぎた悔恨を、
一步ごとについてくる執拗な不安を。

註

- (1) Jean Antoine de Baïf (1532—1589). フランソア一世治下の外交官でヴェネツィア、ドイツ駐在大使を歴任した父 Lazare de Baïf を持つ。ロンサール、デ

ユ・ベレーと共に、優れたヘレニストであるジャン・ドラ（Jean Dorat）の教え子で、プレイヤー派の母胎「部隊」^{ブリガッド}を形成した。ペトラルカ風恋愛詩人。

(4) バイフの文体をからかってこのようにペトラルキスムの常套句を並べたものか。

ソネ 25

呪われよ、あの年、あの月、あの日、あの時、あの瞬間よ⁽¹⁾。
 また人をあざむく希望よ、呪われよ。
 あの時私はここに来るためにフランスを捨てた。
 フランスを、わがアンジューを。懐しさに胸もはりさける。
 確かに私は幸運の鳥に導かれてはいなかった。
 しかも私の心は十分に私に告げてはくれなかった、
 天が悪しき兆に満ち満ちていたことを。
 あの時マルスがサトゥルヌスと結びついていたことを。
 幾度も良き忠告は私に思いとどませようとした。
 だが運命は常に逆の方へ私を引きずっていったのだ。
 もしも私の欲望が私の理性を盲いにしたのでなかったら、
 この旅を思いとどまるのに十分ではなかったか、
 不吉にも、家を去ろうとする時に、
 戸口のところで足を痛めてしまったことは⁽³⁾。

註

- (1) ペトラルカの作品中最も有名なソネ61の冒頭が基になっている。《Benodetto sia'l giorno e'l mese e l'anno, E la stagione, e'l tempo e'l punto.》〔Canzoniere, 61〕但し祝福を呪いに変えている。
- (2) マルスは戦争のしるし、サトゥルヌスはメランコリーのしるしである。
- (3) ここにも見られるように、オウィディウスのイメージを借りて歌うため、かなり虚構的な性格がこの作品に与えられている。

ソネ 26

もしもこれから長い旅に発とうとする者が、

すでに旅を終えた者の言葉を信ずるべきなら、
 また海の波に長いこと苛まれ力尽き心なえて
 難波の危険を脱した者に耳を傾けるべきなら、

私を信じ給え（ロンサールよ）たとえ君が知恵にすぐれ、
 また幾らかは私より（私の思うには）年長であるとしても⁽¹⁾。
 なぜなら私は君より先にこの海を渡ったのだから。
 すでに私の船は岸边を見出しているのだから。

それ故君に教えよう、このローマの海は、
 至る所危険な岩礁に満ちて、数々の災いを
 隠していると。またここでは多くの場合、

シチリアの怪物⁽²⁾ どものあやしい歌に惑わされ、
 カリュブデスを避けんとしてスキュラに陥るだろう⁽³⁾ と。
 もしも君が自在に帆を操り右に左に進めるのでない限りは⁽⁴⁾。

註

- (1) 実際には1524年生れのロンサールの方が1522年生れのデュ・ベレーより年下である。当時はあまり正確な年令を問題にしなかったのだろうか。
- (2) セイレーン。
- (3) これも格言となっている表現。《Evitata Charybdi in Scyllam incidi》
- (4) 海の旅のモチーフが繰り返されるのはデュ・ベレーの体験に基くのではなく、審美的な理由による。オウィディウスもオデュッセウスも海の旅と結びついて
 いるからである。

ソネ 27

野心でもなくまた富を得ようとの欲でもない、
 万年雪を頂くあの山々を眺めるために⁽¹⁾
 父祖の岸边を私に捨てさせたものは。
 多くの危険を冒して私に運試しをさせたものは。
 かって滅びたことのない真の名誉、
 ひとり不滅を誇る真の美德が、
 私の欲望をあまりに大きくふくらませたので、

より大きな幸を神々に祈ろうとも思わぬほどだ。

義務が私をつないでいる名誉ある隷従は
フランスの山々をイタリアへと越えさせた。
また異国の岸辺に三年もの間私をひきとめた⁽²⁾。

今私の嘆くこの岸に。それどころかこの義務のためならば、
フランスをインドにもモールにも私は変えるだろう。
天国を地獄に変えることさえ私はするだろう。

註

- (1) アルプスを越えてイタリアに入ったことを指している。
(2) デュ・ベレーは1553年にイタリアに来た。従ってこれは1556年のことになる。恐らく大半のソネがこの時期に書かれたものと思われる。

ソネ 28

ここに来るために君に別れを告げた時、
君は言った（わがラエー⁽¹⁾よ）、今も覚えているが、
今のままの君をベレーよ忘れ給うなど。
行く時と同じ君のままで帰り給えと。

だから私は来た時と変らぬ自分で帰って行く。
ただ悔恨だけを別として。それが私の心を蝕み、
額にしわを寄せ、髪の色を褪せさせる。
またこの目元をもいっそう深く窪ませる。

この身を削り細らせるこの悲しい悔恨は
罪を感じるせいではない（私は潔白だから）。
三年もの歳月をこの岸辺にとどまったせいなのだ。

恩知らずの希望に惑わされて
はるばるとここへ来て貧困に出会うために、
フランスを（何と愚かにも）捨ててしまったからだ。

註

(1) Robert de La Haye. パリ高等法院判事。ラテン語詩人。

ソネ 29

家にかじりつく若者を私は死よりも嫌う。
彼らは祭りの日でもなければ外へ出ようともせず、
日の光を野性の獣にもまして恐れ、
自らすすんで己が家の囚人となっている。
だが旅をする老人も私は好きにはなれぬ。
彼らはあちこちと駆けまわってとどまることを知らず、
頭の軽いほどには足の方は軽くもないのに、
まるで飛脚さながら決して一つ所に腰を落ち着けぬ。
一方は己れを錬えもせず安全な所にとどまり、
他方は死ぬまで休みを取ろうともせず
夜も昼も多くの危険な場所を廻り歩く。
一方は豊かだが愚かな人生をめでたく過ごし、
他方は物乞いする貧者よりも苦しみながら
旅の中で不幸な知恵を身につけていく。

ソネ 30

誰であれ (わがバイユール⁽¹⁾ よ) 見知らぬ空の下に
長居をするものは、また誰であれ平然として
港から港へと冒険を求めて渡り歩き、
異邦人として別の太陽の下で暮せる者は、
肉親の愛をも、恋人への愛をも、また自然が
我々を育てた胸に対して抱かせる愛をも、
すべて忘れて絶えまなく旅を続け、
帰ろうとも思わずにいられる者は、

岩から生まれた息子，または残忍な熊の息子だ。
 かつて情けを知らぬ雌虎の乳房を吸った者⁽²⁾ に
 いかにもふさわしい。まして聞いた例もない，
 野性の獣が己れの隠れ家に戻ってこぬという話は。
 また我らの間に家畜として暮した獣さえも
 家を求めて切ない思いに身を焼かぬ時はないものを⁽³⁾。

註

- (1) Louis Bailleul, デュ・ベレー枢機卿のローマ行きにスタッフの一人として加わった。
 (2) 『アエネーイス』中のディドのエピソードから取られている。[Aeneis, IV, 367]
 (3) ここは恐らくオウィディウスが基になっている。《Cum bene sit clausae cavea Pandione natae, / Nititur in silvas illa redire suas. ……》[Ex Ponto, I, III, 39—42] 詳しくは H. ヴェベールの註参照。

ソネ 31

幸せだ，オデュッセウスのように，見事な旅をした者は。
 あるいはまた首尾よく金羊毛を手に入れて
 経験と分別とに満ちて故郷に帰り，
 残る生涯を肉親の間で過ごした者⁽¹⁾ は。
 私には，ああ，いつまた見られよう，わが小さき村の
 煙突に煙の立ち昇るのを⁽²⁾。またいかなる季節に
 わが貧しき家の囲い地を再び見られよう。
 それこそ私には一つの王国，またそれ以上であるものを。
 私は好きだ，わが祖先の建てた住み家が，
 ローマの宮殿の恐れを知らぬ威容よりも。
 硬い大理石よりはもろい^{スレート}板岩が私は好きだ。
 ガリアなるわがロアールがラテンのティベリスよりも，
 わが小さきリレ⁽³⁾ がパラティヌスの丘よりも，
 また海の風よりもアンジューの優しさが私は好きだ。

註

- (1) イアーソーン。
 (2) 故郷の煙を見たいというオデュッセウスの願望はよく知られている。また格言にもなっている。《Patriae fumus, igne alieno luculentior.》
 (3) デュ・ベレーの生家のあるアンジュー地方の小村。

ソ ネ 32

哲学を究め学識豊かな者となろう。
 数学においても、また医学においても。
 法律を修め、またそれ以上に高い野心をもって
 神学の奥義を究め尽そう。

封泥と絵筆とでわが人生を楽しもう。
 また剣術と舞踏とで。そう私は考えていた。
 それらを全て学ぶことに秘かな誇りを覚えてもいた。
 フランスをイタリア住いに変えた時には。

おお、人間の大神の思案よ、私はこんなにも遠く来た。
 苦悩と老いと心痛をふんだんに手に入れて、
 生涯の最良の時に旅に失ってしまうために。

同様にしばしば船乗りもせい一杯の宝として
 金塊ならぬにしんの獲物を持ち帰るのが関の山、
 私のように、不幸な旅を重ねたあげくに。

ソ ネ 33

どうしたらいいのか、モレルよ。言ってくれ、聞えるなら。
 このままここに長居しようか。
 それともフランスの野を再び見に行こうか、
 やがて春の日に雪が溶け出す頃となったら。

もしもここにとどまるなら、ああ、私は時を失ってしまう、

長い希望で空しく身を養ううちに。

またもしほかに安住の地を求めるならば、

あてにしている報酬をわが労苦から奪ってしまう。

かくして空しい希望をつなぎ生きていかねばならぬのか。

かくして三年もの骨折りを水泡に帰してしまうのか。

それゆえ私は動くまい。いやいやここを去るとしよう。

それとも君が勧めるならやっぱりここにとどまろう。

ああ（愛するモレルよ）どうしたらいいか言ってほしい。

いわば私は狼の耳を擱んでいるところだから⁽¹⁾。

註

(1) 古い格言。《Auribus teneo Lupum.》即ち進退に窮している。

ソネ 34

ちょうど船乗りがはるか遠い沖合で
長い間猛々しい嵐にもまれたあげく、
ついには櫂を取り力一杯漕ぐことで
船を難破の危険からやっとの思いで救い出し、

今はもう荒れ狂う高波も風も泡立つ波も、
港に立って恐れることなく眺めるように、
また遠くでほかの者が今にも沈もうとして
空しく岸に手をさしのべるのを眺めるように、

そんな風に（愛するモレルよ）港に立って
君は海を眺めている。安全な所に身を置いて
逆まく波が幾千の渦となるのを眺めている。

波が幾度も盛り上り天にも届くのを眺めている。
そして君のデュ・ベレーが穴のあいた船の中で
舵を前に座り風にもてあそばれているさまを。

ソ ネ 35

長い航海を終えた船は（ディリエ⁽¹⁾よ）
 ついには港のふところ深くしまわれる。
 また長い間大地を耕してきた牛も
 ついには牛飼いの手で首輪を外される。
 老いた馬もついにはたずなから自由になる。
 息切れを起こしたり恥をさらしたりせぬように。
 また戦さの苦勞から体を休めるために
 老いた騎士もついには身を引くものなのだ。
 だが私がこれまで味わったものは苦痛ばかり、
 苦痛と空しい希望がもたらす禍いと、
 苦惱と不安と哀惜と悲嘆ばかり。それなのに
 私は少しづつアウソニアの海の上で老いていく。
 しかも希望はまるでない、いかなる幸運が訪れようと、
 今のこの苦しみをいつか逃れられるという希望は⁽²⁾。

註

- (1) Dilliers. ジャン・ベルトラン（後出）の女婿。
 (2) このソネの手法もペトラルカ風恋愛詩によく用いられるものである。

ソ ネ 36

曲りくねったティベリスの波うつ岸辺をさして
 私が生まれた国を後にしたあの日から数えて
 天は三たび見た、ななめに傾いた道を辿って
 偉大な昼の燈火がその旅を始めからやり直すのを。
 だがかくも激しく帰国を願う私には、
 この三年はトロイア包囲の月日より長い。
 パリを再び見たいと（モレルよ）望めば望むほど
 天の歩みは私にとってますます遅くなるばかり。

その歩みのあまりの遅さ、その動きのあまりの鈍さに、
私は思うのだ、冷たい山羊座も私の昼を短かくはせず、
蟹座もまた私の夜を短かくはしないと。

こんな風に（愛するモレルよ）時は私に長いのだ、
フランスと君とを遠く離れては。またこんな風に、
自然はあらゆるものを私の苦悩と共に長くするのだ⁽¹⁾。

註

- (1) このソネ全体がオウィディウスに拠っている。《*Ut summus in Ponto, ter frigore constitit Ister, ……Cumque meis curis omnia longa facit.*》〔*Tristia*, V, 1~10〕

ソネ 37

あの頃私は己れを頼りに生きていたはずだ。
あるがままの己れ以上に高望みをすることもなく。
また私にできるわずかのことで幸せに
ペンと書物との富に満足して生きていたはずだ。
だが神々は喜ばれなかった、若き日の自由を
そのまま迎えることも、また野心に捉われたことがないように、
労苦にも悲嘆にも捉われることなく、
その後の日々を私が自由に生きることも。

神々は喜ばれなかった、私が老年を迎えて、
わが家で暮す幸福がいかなるものか、恐れも妬みもなく、
家族と暮す幸福がいかなるものかを知ること⁽¹⁾。

神々は喜ばれたのだ（ああ）この異国の岸で
私の自由が一転して牢獄と変り、
わが歳月の花が人生の冬と変わることを。

註

- (1) 家にとどまることを勧める古代人の教えはさまざまな格言になっている。《*domi*

manendum. >><<domi manere, convenit felicibus. >><<domi manere virum
for tunatum decet. >><<domi manere oportet belle fortunatum. >>

ソ ネ 38

おお、何と幸せなことか、己れに似た人々の間で
人生を送れる者は。上べを飾ることもなく、
恐れもなく妬みもなくまた野心もなく、
平和に己が貧しい家を治める者は。

より多くを得たいという哀れむべき欲望が
彼の自由な心を暴君の如く支配することもない。
最大の欲望といえども野心を伴わぬ彼の欲望は
己が領地を越えてふくれ上るようなことはない。

それにまた他人の問題で進退きわまることもない。
彼の何より大きな希望は己れ一人にかかっている。
彼が自分の宮廷で、国王で、寵遇で、主人なのだ。

外国暮して財産を食い潰すようなこともない。
わが身を他人のために危険にさらすこともない。
今より金持になろうとはついぞ考えもしないだろう。

ソ ネ 39

私は自由を愛する。しかも隷従に疲れている。
私は^{クール}宮廷を愛さぬ。しかも^{クルテイゼ}追従を言わねばならぬ。
私は虚飾を愛さぬ。しかも表を飾らねばならぬ。
私は素朴を愛する。しかも老櫓さばかりを学ぶ。

私は富を崇めぬ。しかも吝嗇に仕えている。
私は榮譽を愛さぬ。しかもこれを讃えねばならぬ。
私は約束を守ろうと望む。しかも違背せざるを得ぬ。
私は徳を求めている。しかも悪徳ばかりに出会う。

私は休息を求めている。しかもそれを見出せぬ。

私は快樂の側に立つ。しかも苦惱ばかりを味わう。

私は弁論を愛さぬ。しかも理屈でかためている。

私の体は病んでいる。しかも旅をせねばならぬ。

私はミューズのために生まれた。しかも人の家事を見ている。

この私は（モレルよ）世界一哀れな者ではなからうか⁽¹⁾。

註

- (1) このソネもペトラルキスムの技法に拠っている。

ソネ 40

わずかな海がドーリキオンの偉大な男⁽¹⁾を
イタケから隔てていたが、雲を着たアペニンと、
真白な髪をしたサヴォアの山々とは、
私をフランスから遠くアウソニアの岸にとどめている。

肥沃なのは私の国、不毛なのは彼の国、
最高の知恵者では私はないが、彼の狡智は人も知る。
彼の家族は家財を守り彼の帰国を待っていた。
だが誰一人私を待って家財を守ってくれはせぬ。

パラスが彼の案内者なら、この私は風まかせ。
彼は苦難によく耐えたが、私は天性柔弱だ。
彼の船はついには母港に錨を下した。

この私にはフランスに帰る確かなあてもない。
憎むべきその敵に彼は見事な復讐をした。
私の仇を討とうにも私は十分強くはない。

註

- (1) オデュッセウス。

ソネ 41

運命は私の苦惱に飽き足りず、

私自身にもこの身を厭わせようと、
わが友のうち最も私の愛した人⁽¹⁾ を連れ去った。
彼なしには私に生きる意欲さえなかった人を。

永遠の夜が君の光を奪い去ったというのに、
私はあの暗い場所へ君を追っても行かなかったのか。
君は私を君の命よりもまた目よりも愛し、
私は君を私の目よりもまた命よりも愛したのに。

ああ、愛する友よ、この私がポリュデウケスの弟となり、
君がカストールの兄となれぬことがあるうか。
我らの友情は兄弟の愛にまさっているものを。

いざ受け給え、この涙を、わが誠実の証として。
またもしも私の思い違いでないとすれば、
かくも稀なる友情の永遠の記憶となるべきこの詩を。^{うた}

註

- (1) この友人は1553年11月に死んだフランソワ・デュ・ベレーのことか。H. ヴェベールの註参照。

ソ ネ 42

今では、わがヴィヌー⁽¹⁾ よ、愛するヴィヌーよ、今では、
あらゆる哀れな者の中で私は最も哀れな者だ。
この私はもはやかつての私ではありえない。
時を失ない、また若さをも失ったからには。

貧困が私の後を追ひ、不安が私の胸を噛む。
昼は私に悲しく、夜はいよいよ私に悲しい。
おお、どれほどの哀惜と苦悩に埋まっていることか。
神が私をパスキューノ⁽²⁾ にもマルフォリオ⁽³⁾ にもなし給わば、
私を苛むこの不幸を感じなくともよかろうに。
私のペンは自由になり、恐れることもあるまいに。

最も力強き人が私に怒りを向けようとも⁽⁴⁾。

信じ給え、ヴィヌーよ、ひとり王者と言える者は、
王侯でさえその上に掟を課することもできず、
意のままに誰についても書ける者のことだと。

註

- (1) Jérôme de la Rovère (della Rovere). ヴィヌーの領主。アンリ二世の特使として1556年9月ローマに送られた。彼の役目は、スペインとの戦争を望み援軍を求めている教皇パウルス四世に、兵を送るという国王の約束を伝えることだった。しかしこの時点ではまだアンリ二世は2月に結んだばかりのヴォセールの休戦条約を破る決心がつかず、和平を主張するモンモランシーと戦争を主張するギュイーズ公との間で迷っていた。また駐ローマ大使ダヴァンソン侯が解任され代ってド・セルヴェが任命されるのも同じ頃である。
- (2) Pasquino. 十六世紀に発掘された古代の彫像で、この世紀の始め頃からナヴォナ広場の宮殿の前に置かれ、この像に諷刺文が貼りつけられる習慣があった。手も足も鼻もないこの像はヘラクレス像だといわれているが、パスキナータを集めた本の口絵にはこの像がさまざまな姿を取って描かれている。例えば好戦的なユリウス二世の頃に出たある本ではマルスに、学芸保護で知られるレオ十世の即位後に出た本ではアポロンになっているという具合である。この像の呼び名は諷刺に巧みな床屋の名からとも、仕立屋の名からとも言われている。
(Dickinson, Du Bellay in Rome, p. 155~156)
- (3) Marforio. パスキナータの兄弟と呼ばれる彫像で、ひげや髪を垂らして横たわった姿勢を取っている。ユピテル像ともラインの河神像とも言われる。はじめサンタドリアーノ教会にあったが十六世紀中頃カピトリウムの元老院宮殿に移された。(上掲書159頁)
- (4) 甥の継ぐべき遺産(ウードンの土地)をめぐる後見人としてデュ・ベレーが争っていた相手はモンモランシーという権勢家に自分の権利を売り渡したため、デュ・ベレーの立場は絶望的に悪くなっていた。ここはモンモランシーの敵意をほのめかしているようである。

ソネ 43

かって私は欺瞞をも悪事をも為しはしなかった。
かって私は一点たりと我らの教養を疑わなかった。
かって私は王命に一度も背きはしなかった。

かって裁判の厳しさをこの身に味わいもしなかった。

わが主君には心から忠義をもって仕えてきた。

友人達にはできる事すべき事を尽してきた。

私は信じている、これまで何びとも私のことで、
何かの被害に会ったとこぼす者の居ないことを。

これがありのままの私なのだ。ところがヴィヌーよ、
神々にも人間にも等しく憎まれた者のように、
不幸が私の後を追い絶えず私を苦しめている。

だが逆境にありながらりっぱな慰めが私にはある。
人が言うのだ、私はこの不幸にはふさわしくないと、
もっと良い運命にこそこの私はふさわしいと。

ソ ネ 44

もしも若き日を過ちもなく過ごし、
高利によって己が家を富ませたこともなく、
人殺しや裏切りを働いたこともなく、
悪しき知恵を廻らせたこともなければ

また約束を違えたこともない功によって、
晩い季節を楽しく暮せるはずであるなら、
私はきっと将来には、もしも私に理があるなら、
大いなる満足でわが晩年を慰められよう。

苦境にある私はこうして自らを慰める。
神々に祈る幸は何も大きなものではない、
ただこの苦難に耐える力を祈るばかりだ。

おお神々よ、幾らかでも我らを気に掛け給うなら、
この贈物を与え給え。これこそ汝らに望むもの、
汝らの慈悲ゆえに、またこの身の潔きゆえに。

ソネ 45

おお継母なる自然よ（確かにあなたは継母だ、
私をもっと賢明にもっと幸福に生んでくれなかったとは。）
なぜ私を己れの主人としてはくれなかったのか。
己が理性に従い、己れだけの人生を生きるために。

私の前に二つの道がある、善の道と悪の道と⁽¹⁾。
徳が右の道へ向えと呼びかけているのを知りながら
尚も私は左の道へ向って行かねばならぬのだ。
不実な希望に従って。それが持つ富は全て手に入れた。

だが、どんな利益であったろう。おお、大した報酬よ。
私は空しい希望でこの身をすりへらした。
手に入れたものは災いと苦悩ばかり。

外国人が私の奉仕の果実を摘み取っている。
私は卑しい仕事で体を痛めつけている。
そしてこの額には他人の恥が刻まれている⁽²⁾。

註

- (1) ヘラクレスの選択が基になっている。
- (2) 他人の恥については諸説あるが、スクリーチが控え目にほのめかしているようにこれはデュ・ベレー枢機卿が問題になっているのだろうか。1555年の夏以来デュ・ベレー枢機卿は国王の不興をこうむっていた。この年即位した教皇パウルス四世はアンジュー家に親しいナポリの貴族の出身で、スペイン人の支配に憎悪を抱いていたが、フランス側でもロレーヌ枢機卿をローマに送って反スペイン同盟の結成について教皇と交渉させた。やがて1555年12月15日、トゥールノン、ロレーヌ両枢機卿と教皇との間で反スペイン同盟が締結されたが、この間デュ・ベレー枢機卿は交渉の外に置かれていた。ちなみに1556年2月にはフランスは一転してスペインとの間でヴォセールとの休戦条約を結んでいる。4月教皇特使カラーファがフランスに渡る。表向きは国際和平を論ずるためということであったが、実際の目的はヴォセールの条約を破らせ反スペイン戦に出兵させようというものであった。アンリはついに援助の約束を与え、9月カラーファはランサック、モンリュック等を伴ってフランスを発っている。しかしアンリはその後も戦争と和平との間で迷い続けていた。

結局主戦論者が勝利してギュイーズ公が軍を率いてフランスを発つのは1556年11月、イタリアに入るのは翌年始めのことである。

ソ ネ 46

もしも労苦と汗とにより、また忠義により、
つつましい献身と長い忍耐により、
体も財産も精神も良心も捧げつくし、
己が利益をいささかもかえりみぬことが、

もしも聖職禄なり何かの報酬なりを与えよと
うるさく催促してはこなかったことが
人を富ませるものなら私も (こう思うのだ)
ついには富を得よう。その値打が私にはある。

だがもしも盗みによって出世ができるなら、
偽りを言い、へつらい、主人を騙すことで、
あるいはそれ以上の悪事によってしばしば出世ができるなら、

わかっていたのだ、不毛の浜に種まいている⁽¹⁾ ことも、
水をふるいにかけて、風を打っている⁽²⁾ ことも。
この私が (ヴィヌーよ)無用な奉公人であることも。

註

(1) 格言を基にしている。《Arenae mandas semina》《arare litus》

(2) battre le vent (風は打つ) はフランスの諺 battre l'eau の変型。即ち無駄骨を折る。

ソ ネ 47

もしも不当な苦しみに悩む友を見て
かって君の魂が哀れみを覚えたことがあるのなら、
もしも君の目が偽りのない苦しみの
鋭い痛みを覚えたことがあるのなら、

これが私の苦しみだ。私の単純な性格と同様に、

巧みのないこれらの詩に描かれているのが。
 たとえ私のために涙をさそわれはしないとしても、
 私の嘆きのごくわずかなため息をも笑い給うな。
 かくて（愛するヴィヌーよ）君の上に無からんことを、
 己が苦勞の報酬を騙し取られて
 美德が味わう悔恨を君もまた味わうことの。
 かくて君の陛下が君に慈愛の御目を注ぎ給わんことを。
 どんなに抜け目のない者の希望をもあざむく何物かが
 君の良き心を空しい約束であざむかざらんことを。

ソネ 48

おお何と幸せなことか、真実が考えよと命ずることを
 偽り隠すよう強られることのない者は。
 傷つけることもならぬ人への配慮から
 ペンの自由を束縛されることのない者は。
 ああ、なぜ私のペンはこの縛めを感じてしまうのか⁽¹⁾、
 私のもっともな哀惜を書き始めようと思う時に。
 なぜ私の魂は己れに許そうとしないのか、
 苦痛を感じることも、またそれを訴えることも。
 人が私に苦痛を与えても私は叫ぶことさえできぬ。
 人が私の苦しみを見ても私は訴えることもできぬ、
 私を哀れめと。おおあまりに卑屈な苦しきよ。
 閉じ込められた火にまして熱い火はなく⁽²⁾、
 骨に取りついた病いほどたちの悪い病いはない。
 沈黙の苦しみにまして大きな苦しきもまたない。

註

- (1) 最高の権力者モンモランシーを裁判の相手としなければならないデュ・ベレーの
 困難な立場をこのソネはほのめかしているようである。
 (2) 当時の辞書に見える諺。《Le feu plus couvert est le plus ardent.》〔Co-

grave, A Dictionarie of the French and English Tongues.]

ソ ネ 49

もしも私の仕えるお方⁽¹⁾ がさまざまな場所で
 四十年もの間忠実に職務を果し、
 最上の宝、最善の持物を何一つ惜しまずに
 最も労苦に値いする御仕事に注いだというのに、
 憎むべき外国人⁽²⁾ の妬み深い奸計が
 忌わしい敵意をこのお方に向けてくるならば、
 また神をも恐れず人々をもはばかりず
 美德に対するに無知と悪徳とをもってするならば、
 無にも等しいこの私に苦しむことが許されようか。
 たとえ何者かが（恐らくは）私の富を妬み、
 私が自由に幸運を攔むことができぬとしても。
 それゆえ私は自らを慰める。そして同じ海にあって、
 わが愛する主君が今にも沈もうとするのを見れば、
 同じ運命に生きることはむしろ私には好ましい。

註

(1) Jean du Bellay (1492—1560)。

枢機卿には1535年に任命されている。1549年ユリウス三世即位後半ば引退した状態でフランスに暮し、1553年ローマに発った。この年はシエナがスペイン軍の包囲を受けていた年であり、ユリウス三世の病状が深刻で生命が危ぶまれていた年でもある。

(2) この外国人はカラッファ枢機卿である。(Carlo Carafa, 1516—1561)その行状にとかく問題のあったこのパウルス四世の甥は、教皇即位後まもなく枢機卿に任じられ、以後教皇に代って政治・外交の一切を握った。仏王アンリを説いて反スペイン戦に出兵させる一方でこの人物はスペイン軍総司令官でナポリ副王のアルバ公とも秘密に交渉を行っていたようである。1557年始めイタリアに入ったギュイーズ公の軍はカラッファが約束通り資金を提供しないために苦境に陥っていた。またこの頃デュ・ベレー枢機卿がスペイン派の枢機卿と結託して講和の交渉を進めていると非難を受けたのもこの人物がからんでのことだったらしい。(Dickinson, D. B. in Rome, p. 141, 143)

ソネ 50

出ていこう（ディリエよ）出ていこう，妬みに席を譲って。
 今日限りこの町の騒ぎから逃げ出してしまおう。
 ここでは最も怯懦な者，最も卑しい者が讃えられ，
 最も優れた人々に従うことが最も少ないのだから。
 徳と運命とが我らを招いている土地へ行こう，
 たとえそこにスキュタイを，またナイルの源を見ようとも。
 永遠の追放をすすんで己れに課すとしよう，
 我らが生涯の名誉にたった一つでも汚点をつけるよりは。
 さあ今こそ，あの残忍な征服者によって
 町のすずめどもの笑いの種にされぬうちに，
 自ら選んだ流刑によって美德を追放するとしよう。
 何と，君は知らぬのか，追放されたかのローマ人⁽¹⁾が，
 人でなしの臣民からは追われる憂き目に会いながら，
 蛮夷の海賊どもの熱い崇拜を受けたことを。

註

- (1) スキーピオー・アフリカーヌス。ザマの戦いではハンニバルを破っている。後，
 汚職の疑いをかけられ引退，故郷リーテルヌムで文学・芸術に専心した。

ソネ 51

モニー⁽¹⁾よ，よろこんで不運を受け入れよう。
 誰一人幸運をしかと握っている保証はないが，
 不運の方ならいつまでも変らぬものではないことを，
 その本来の性質上あてにしてよいものだから。
 賢明な船長^{ふなおさ}はネプトゥーヌスの好意を恐れる。
 良い天候が長続きはせぬことを知るゆえに。
 手に負えぬ海を絶えず恐れているよりも，
 多少の嵐を忍ぶ方がよほどましではあるまいか。

幸運によって人は騙されやすくなり、
 逆運によって人はいっそう知恵をつける。
 一方は徳を消し他方はそれを露わにする。
 一方は偽りの仮面で我らの目をあざむき、
 他方は追従者から友人を見分けさせる。
 だがそれ以上に己れの姿を我らに教えてくれるのだ。

註

(1) Mathieu de Maunny, デュ・ベレー枢機卿に随行した聖職者。

ソネ 52

もしも涙が不幸を癒す薬となるなら、
 泣くことで悲しみを抑えることができるなら、
 金を出しても（わが殿⁽¹⁾よ）涙を買わねばなりませんまい。
 涙よりも高価な物は何一つ見られぬことになりましょう。
 だが実際には涙には何の値打もありはせぬ。
 人が泣きながら悲しむまいと思うにせよ、
 また夜も昼も悲しみたいと思うにせよ、
 苦悩の流れを変えるなど所詮はできぬものだから。
 心臓が頭脳にこの液体を分泌させ、
 そして頭脳がこれを目からしたたらす。
 だが苦痛の方は目から流れ去ることはない。
 それなら何の役に立とう、いつまでも泣いたところで。
 よく言うように火に油を注ぐ⁽²⁾だけのこと、
 得る所なく憩いと食事を失なうだけのことでしょう。

註

- (1) アヴァンソン侯。
 (2) 格言。《oleum addere camino.》

ソネ 53

生きよう（ゴルド⁽¹⁾ よ）、生きよう⁽²⁾、老人達の噂のために
 楽しい人との交わりをお預けにするのはやめておこらう。
 生きよう、人の命はかくも短かくかくも尊い。
 王侯でさえ命にはただの用益権しか持たぬのだ。

日は夕べには消えるが朝にはまた輝く。
 季節もまたいつもと同じ道に戻ってくる。
 だが人間がこの甘美な光を失なった時、
 死は永遠の夜に彼を眠らせてしまうのだ。

それなら獣の生活を我らもまねるべきなのか。
 否。それどころか常に頭を天に向けて⁽³⁾
 快楽の甘さをしばしば味わうことにしよう。

まさしく狂気の沙汰だろう、現在の幸福の確かさを
 あてにもならぬ希望と取り替えて、
 己が本来の欲望に絶えず逆らっているとしたら。

註

- (1) Jean - Antoine de Simiane, seigneur de Gorde (1525—1562). 教皇秘書。
 (2) 当時好んで模倣されたカトゥルスの詩句が基になっている。《Vivamus, mea
 Lesbia, atque amemus》〔Catullus, Carmina, V, I〕但し恋愛詩人達と異
 なってデュ・ベレーは恋の喜びを讃えるためでなく現世の生活を楽しむよう勧める
 ためにこの詩句を用いている。
 (3) 人を動物から区別するのは頭を常に天の方へ、より高いものの方へ向けているこ
 とだということ考えはオウィディウスから来ている。《os homini sublime dede-
 cit; caelumque tueri jussit et erectos ad sidera tellere vultus》〔Metamor-
 phoses, I, 85〕この考えを、ユマニストで医者のアンプロワーズ・パレは支持し、
 ルターは否定するために取り上げている。人間性を讃美するユマニズムと神の恩寵
 の前に人間の無力を説くルター主義との違いであろう。

ソネ 54

ならず者とは名ばかりのマロー⁽¹⁾ よ、
 人が君を賢いというのは当っている。
 だが貧しさを逃れるために君が知恵を絞っていると

言う者がいたら、君の顔がそれを打ち消している。

真実豊かで真実幸福に生きる者は
両極端のどちらをも遠く離れ、
欲望をほどほどにとどめておく者だ。
真の富とは満足のことなのだから。

さあ（愛するマローよ）、我らのご主人が、
公益のために自然が生んだあのお方が、
他人の問題で頭を悩ましておられる間に、
ぶどう畑へ先に行ってサラダを調べよう。
どうして人が知り得よう、明日誰が死に誰が病むと。
ただ今日を生きる者だけが生きる者なのだ。

註

- (1) Maraud — Charles Marault. デュ・ベレー枢機卿の家の下僕。このソネに出てくるぶどう畑の管理を主として任されていた。枢機卿は遺言によってこのぶどう畑を彼に贈っている。

ソネ 55

モンティニェ⁽¹⁾よ(とは君が訴訟に慣れているからだが)
もしも絶大なる力を持つ神々の一人が
神としての全存在をステュクスにかけて
あらゆる幸を平和に楽しませんと我らに誓約したのなら、
この神が誓約に違反したのであるからには、
我らはコピテルの前に上告控訴いたさねばならぬ。
だがもしも我らの運命を判決をもって裁く
パルカ達の意志には抵抗いたし得ぬものならば、
控訴はいたすまい。我らとて特権など無きことは、
我らのごとく、これなる同一の法廷において、
有罪と宣告された他の人々と同断であるゆえに。
さりながらももしも苦悩が我らの自由な心の上に

不幸の名において何ほどの差し押えをせんとするならば、
我らもかかる執行には断じて異議を申し立てよう⁽²⁾。

註

- (1) Julien de Bailleul, Seigneur de Montigné. 前出(ソネ20)のバイユールの兄弟。
- (2) 訴訟用語による遊びはラプレーにも見られる。「古代の法曹学者の明言いたし居る通り、またバルドゥスが『勅法彙纂「遺贈=関シテ」ノ最終勅法文』において述べて居るように、宿命運勢の神によって定められた裁決には断じて上告いたし得ぬものだ。その理由はと申すに、運勢の神は、この神及びそれが下し給える占筮に対する上告控訴を受けられるほどの優れた者をば全然お認めにはならぬからだ。』[Rabelais, Tiers Livres, chap. XII, ad fin. 渡辺一夫氏訳]

ソネ 56

この私と同様に苦境を味わっているバイフよ、
嵐と戦うことがいつも正しいとは限らない。
帆を下し難破を恐れて屈することが必要だ、
怒れるネプトゥーヌスの狂乱を前にしては。

だからといって、恐れからまた卑劣さから、
拱手して犠牲となってはならぬ。勇気を出し、
大抵は希望ありげな表情を浮かべていることだ。
また必要から徳を作る⁽¹⁾ ことも必要だ。

それゆえ手に余る心配事で心を悩ますのはやめて、
その必要があれば自ら己れを助け、
不幸と戦うことにしよう。私の方も約束しよう、

今後は運命を物ともしないことを。
たとえ運命が私をしりぞけようとしても
私は踏みとどまる(バイフよ)、何があろうと。

註

- (1) 格言。<<Facere de necessitate virtutem. >>

ソネ 57

君が平原に野兎を追いかけ、
 森に猪を、空に鳶を追いかけている間、
 また鷹やはいたかが舞い上るのを見て
 楽しい苦勞で君が体を錬えている間、
 不運な我らはローマの宮廷を追いかけている。
 ここで耳にするものは、君の頃とは違って、
 笑い、飛びはね、舞い踊るざわめきではなく、
 血と銃火と非情な戦争の話ばかりだ⁽¹⁾。

一方君のゴールドとこの私のせい一杯の楽しみは、
 君を懐かしみ、君のことを語りあい、
 誰かの作品を読み、数行の詩を作ること。

それ以外に(わがダゴ⁽²⁾よ)ここで味わうものは、
 苦痛と苦悩と哀惜と心痛ばかり。
 ル・ブルトン⁽³⁾のほかには我らを笑わせる者もない。

註

(1) 1556年夏のローマは戦争の準備に明け暮れていた。スペインを憎むパウルス四世は甥のカラーファ枢機卿の影響もあってスペインと決戦しイタリアからフェリーペの影響力を一掃しようと決意を固めていた。砦を新たに築くために家は取り壊され畑は荒れるにまかされた。ナポリ副王アルバ公が軍を率いてローマに近づくにつれ、ローマの混乱状態はつのっていった。一人元気なのは教皇ばかりで、町の人々はおびえきっており、教皇が新たに募った二万の兵も頼りにならず、この兵の訓練を任されたモンリュックは、これがカエサルやスキピオーを出した民族とは信じられないとのべている。(Dickinson, D. B. in Rome, p. 130~131)

(2) Dagaut. この人物については知られていない。

(3) 次のソネの訳註参照。

ソネ 58

ル・ブルトン⁽¹⁾は物識りで実に巧みに書けるのだ。
 フランス語でもトスカナ語でもギリシア語でもラテン語でも。

話をさせれば面白く人間性にあふれている。

共に居て楽しい仲間でいつでも人を笑わせる。

すぐれた判断力を持ち、りっぱに判別して見せる、
白を黒から。つまりは大した作家なのだ。

手紙の一つ位なら即座に書いて見せる手腕、
そのすぐれた早技は口で言うのと変らぬ位。

ところが彼は怠け者で、自分の職業を恐れるあまり、
まる一か月も（私が思うに）断食するはめになろうとも、
ただの十五分も働くつもりはなさそうだ。

早い話彼のぐうたらぶりは、はっきり言えば、
この四か月彼が私の部屋に居ついで以来、
彼の影を見ただけで私も怠けてしまうほどだ。

註

- (1) Nicola Le Breton (1506—1574). デュ・ベレー枢機卿の秘書。後ロレーヌ枢機卿の秘書となる。『哀惜詩集』のコピーを詩人に無断で持ち出しある貴族に売り渡したのはあるいはこの人物か。

ソネ 59

君は私に会う度に（ピエール⁽¹⁾ よ）きまって言う、
勉強が過ぎるとか、恋をしなれば、とか、
こんな書物を年中まわりに置いているせいで
目がかすんだり頭が重くなったりするのだとか。

ところが君は知らないのだ、この病気が、
読みすぎたせいでも長くこもり過ぎたせいでもなく、
毎日でき上っている書類の山を見たせいなのを。
これが、わがピエールよ、私の勉強する本なのだ。

だからもうそんな話はやめてくれ、もし君が
私を喜ばそうと、私を怒らすまいと思うなら。
それよりも君がその見事な腕をふるって

私のひげを洗い、髪を刈り込んでくれる間、
 気うつ退治に、もしよかったら話してほしい、
 教皇のニュースを、そして町の噂を。

註

- (1) Pierre. ローマの床屋。あるいは枢機卿の家に召し抱えられていた床屋か。当時ローマ在住の貴族や枢機卿の家の使用人は少なくても四十五人から多くて三百人ほどであったという。デュ・ベレー枢機卿の場合、ラブレーが滞在していた頃のリストによれば、秘書、司祭、歌手、リュート奏者、料理人、馬丁といった者のほか仕事の内容ははっきりしないが給金を受けていた者を含め、総勢百人を越す世帯だった。(Dickinson, D. B. in Rome, p. 90)

ソ ネ 60

閣下⁽¹⁾，ここに歌われるのを聞こうとはお考えなさいますな，
 国王の讃歌も，ギュイーズ公⁽²⁾の栄光も，
 かのシャティヨンの方々⁽³⁾が獲得された栄光も，
 偉大なるモンモランシーに捧げられた大聖堂も。
 またお考えなさいますな，^{マダム・サジエス} 叡知⁽⁴⁾の峻厳な眉と
^{デーモン} 天にも鬼神にも星辰にも立ち向かう
 その誇り高き企てとをここに見ようとは。
 運命を，死を，また正義をここに見ようとは。

まして黄金を。この私にはふさわしからぬものゆえに。
 その代り小さな猫のささやかな讃歌⁽⁵⁾を作りました。
 これを捧げましょう，ほかに贈物もない私は。

お納め下さい（閣下）そして私をお許し下さるよう，
 私の調べが舞踏会のためにはあまりに卑しく，
 ただパスピエとかブランル⁽⁶⁾の類いを私が奏でましても。

註

- (1) この作品が捧げられているアヴァンソン侯。
 (2) François de Lorraine (1519—1563). その父クロードの時からギュイーズ公と

なる。カール五世との戦いで功をたて、特にメッツの防衛で名を挙げた。1557年初頭には仏軍を率いてイタリアに入っている。ソネ45, 49の訳註参照。

- (3) コリニー提督(Gaspard de Chatillon, 1519—1572), コリニー枢機卿(Odet de Coligny, 1517—1571) らを指すか。
- (4) madame Sagesse. ここに並べられている数々のテーマは1555年のロンサールの『讃歌集』 *Les Hymnes* (ローモニエ版八巻)に入っている讃歌の題名から取られている。その順序から見てもこれは哲学を指しているものと思われる。
- (5) デュ・ペレーのローマ滞在中の作品『田園遊楽集』 *Divers Jeux Rustiques* (1558年刊)の中の『猫の墓碑銘』を指す。
- (6) パスピエもブランルも舞踏曲の一種。

ソネ 61

心の友は財布の友であると、
 どこかの高潔にして大胆な借り手が言うだろう。
 他人の金は気前よく使ってみせるが
 ご本人は救貧院へ一目散という手合いが。
 だが考えても見よ、それほど豊かな泉があるものか、
 汲めども尽きぬほどの。それほど豊かな貸し手があるものか、
 一文無しの連中に関わりあったあげく
 ついには借り手にまわらずにすむほどの。
 ゴルドよ、もしもローマでうまく暮そうと思うなら、
 好意は惜しみなく与え給え。だが、やめることだ、
 君の手を誰にでも気前よく開いて見せるのは。
 一方はこれにより敵をも抱き込むことができよう。
 だがもう一方はこれで友を失うことにもなりかねぬ。
 その上金を失うならこれは二重の損失だ。

ソネ 62

かの抜け目ないカラブリア人⁽¹⁾ は友人の欠点を
 大小選ばずあてこすって誰にも容赦をせぬ。
 ちくりと刺した当の相手さえも笑わせて

招いてくれた人を着にしては楽しんでいる。

それゆえにもしも鋭敏な人びとが私の詩の中に
笑いにまぎらして人を刺すのを認めても、
私はその人の偽りの友だとは誰も言わぬ。
私をそう考えるのは重大な誤りというものだ。

諷刺詩は(ディリエよ)世の人の鑑なのだ。
ちょうど鏡に写したように、賢い人はそこに眺める、
己れのうちの醜さも美しさも全てありのままに。

それゆえ誰も読まぬがいい。また読みたいと思う者は、
己れの似姿がこの絵の中に⁽²⁾面白おかしく
描かれているのを見ても怒らぬことだ。

註

(1) ホラティウス。

(2) 「似姿」「絵」という表現はソネ21でこの作品をデュ・ベレーが肖像画と名づけていることを想起させる。

ソ ネ 63

何者だろうか、自分こそは忠実な友であると
人には思わせたがり、そのくせ時代が変わると、
忽然として最も有力な人々の味方となり、
あるいは最も資力ある人々の側につく者は。

何者だろうか、国王もわが掌中にあると言う者は。
私が言うのはつまりその男が宮廷を遠く離れ
異国に居るのにとのことだ。誰だろう、レトランジュ⁽¹⁾よ。
レトランジュよ、ここだけの話、教えてくれ給え。

さあ一体誰がそれほど変り身の術に長け、
教会の人々の間にあっては軍人と思われ、
軍人の間では僧侶のようだとされるのか。

私は彼の名を知らぬ。だがそれが誰であろうと、

彼は忠実な友でもなく、国王の寵臣でもなく、
勇敢な騎士でも良き助言者でもありはしない。

註

- (1) Charles de Lestrangle (?—1565). ギュイーズ枢機卿の秘書。マニエの作品にもこの人物への言及があり、それによると国王の意見を親しく聞くことのできた人物であるという。〔*Soupirs*, no. 6〕 このソネの5行目参照。また *l'étrange* (Lestrangle) は異国の人という意味になる。7行目参照。

ソネ 64

自然は好んで私生児に格別の好意を与えている⁽¹⁾
また多くの場合私生児は最も豪胆な人々だ。
快樂が彼を喜ばすものであればあるほど
恋の戯れにもいっそう力を発揮する。

メドゥーサを討った者⁽²⁾ も、不敗のヘラクレスも、
インドの征服者⁽³⁾ も、幸多き双子の神々⁽⁴⁾ も、
かつて名を馳せたあらゆる庶出の神々も
このことを(ビゼ⁽⁵⁾よ)一層本当らしくしている。

また当代にあってもどれほどの私生児が、
あるいはアポロンの技に、あるいはマルスの技に、
嫡出の人々をはるかに凌ぐのを見ることか。

つまりはいつの世にも私生児は気高い精神の主なのだ。
ところが(ビゼよ)話に聞いたあの私生児⁽⁶⁾は
他の私生児の評価までも私に下げさせてしまうのだ。

註

- (1) 当時私生児は人の最も血氣盛んな頃の子供として嫡出子より活力に恵まれていると考えられていた。
(2) ペルセウス。ユピテルとダナエーとの子(即ち庶出)。ヘラクレスはユピテルとアルクメネーとの子である。
(3) パッコス。ユピテルとセメレとの子。
(4) ポリュデウケースとカストール。ユピテルとレダの子。(但しホメロスより後で

はカストールのみ夫テュンダレオスの子)。

(5) Bizet. スクリーチによればイタリアにあったギュイーズ公の秘書 Odoard Bizé. しかし H. ヴェベールは土地を廻る裁判(甥の為に争っていた)での代訴人であった Claude de Bizet であるとしている。デュ・ペレーは1560年このビゼの家で亡くなるのである。

(6) この私生児が誰であるのかは知られていない。

ソ ネ 65

君はわが怒れるペンの激しさを恐れない。
 君をそしめる種が私にはないと考えているのだろう。
 ただマスチフのように毒ある歯を噛み鳴らして
 君が私の上に怒りを吐き出したあのことを除いては。
 それもただ噂でしか私が知らぬと君は信じている。
 またたとえ私が君を、信義に欠ける奴だと、
 詐欺師だと、国王を裏切る者だと言ったところで、
 君の前では私の力もなえてしまうと君は信じている。
 君に仇討をする種はよもやあるまいと君は思っている。
 君が飲み食いするだけのくの棒だというほかには。
 ところがどうして私にはもっと痛烈な手があるのだ。
 何、オルペウスの愛⁽¹⁾ だって。また信仰の何たるかを
 君が知らないことだって。否。ではその悪徳は何なのか。
 それはつまり早い話君が教師^{ペダント}(²) だということだ⁽³⁾。

註

(1) 男色を指す。

(2) un pédante. この語形はイタリアニスムである。E. ユゲはこの語に《Homme qui enseigne》という解釈を与えこのソネを例に引いている。

(3) このソネで攻撃されている「教師」については次のソネの訳註参照。

ソ ネ 66

驚くことはない、あらゆる人を彼⁽¹⁾ が蔑んでも。

他人を見下して己れ一人を尊しとしていても。

他人の作品には掟を課したが、

己れにアリストタルコスの權威を与えていても。

パスカルよ、これが教師なのだ。いかに見せかけようと、

教師はどこまでも教師なのだ。教師と国王、

この二つには何かしら通うところがありはしないか。

この二つはお互いに符合するのではあるまいか。

教師の臣下は彼が教える学生たちで、

各学級が彼の領地、学級担任が彼の摂政なら、

彼の学校は（パスカルよ）彼の王国というわけだ。

だからこそかつてかのシュラクーサイ人⁽²⁾が

シチリアの王の名を失った時

君主がだめなら教師にでもと望んだのだ。

註

(1) シェンメル版の註ではこの人物を Louis Le Roy であるとしているが、スクリーチは疑問としている。確かなことはただ学校教師で苛酷な批評家であるということだけである。国王 roy という語とこの人物の名が語呂合せになっていることも考えられる。

(2) ディオニュシオス。シュラクーサイの僭主。理想主義者でプラトンの国家を実現せんとして失敗し、国を追われて後コリントスにひきこもって学校教師となった。

ソネ 67

マニーよ、私は見るのも嫌だ、お世辞をやたらとふりまき、

何を見ても上出来と言ひ、何にでも驚いてみせ、

私の欠点を賞め讃え、私の耳をくすぐる者は。

まるでこの私が君侯か大領主でもあるかのように、

だがうるさい叱言屋も私は腹に据えかねる。

駄作も傑作も区別なく片っ端から難癖をつけ、

自分の作品が読まれる時は喜んで聞くが、

ほかの詩人の詩を読む時はまるで眠っているようだ。

前者は偽りの讃辞で私をあざむき、
下手な詩を良い詩に直すのを妨げて、
私をいい気にさせ、お陰で私は皆の鼻つまみとなる始末。

後者は私の厭気を誘い、どんなに努力をしてみても、
彼のお気に召さぬとあっては私のお気にも召さぬのだ、
彼の作品一切が私の作品一切と同じ位に。

ソ ネ 68

私は嫌いだ、フィレンツェ人の高利を貧る吝嗇が、
頭の狂ったシエナ人の無節操な考え方が。
ジェノア人の滅多に真実を言わぬことが、
ヴェネツィア人のあまりに巧妙なやり口が。

私は嫌いだ、フェラーラ人は何だか知らぬがその欠点ゆえに。
ロンバルディア人は例外なしに不実だから、
尊大なナポリ人はその大いなる慢心のゆえに、
怠惰なローマ人は努力を少しもせぬゆえに。

強情なイギリス人も、身の程知らずのスコットランド人も、
不実なブルゴーニュ人も、口の軽いフランス人も、
傲慢なスペイン人も、飲んだくれのゲルマン人も。

要するにどの国民も何かしらその欠点ゆえに嫌いなのだ。
またそれ以上に出来の悪い私自身が私は嫌いだ。
だが何よりも嫌いなのは知^{ベダンテスク}ったかぶりの知識なのだ。

ソ ネ 69

なぜ私に吠えたてるのか、飢えた老いぼれマスチフよ、
まるでデュベレーには身を守る術がないとでもいうように。
なぜ私を傷つけるのか、私は君を傷つけたこともないのに。
ただ君をしばしば買いかぶったことを除いては。

何が君を、妬み深い犬よ、私に対してけしかけるのか、

そこに居ない私に。君は信じているのか、私の復讐が
ここからフランスまで矢を届かせられぬとでも。

君のよりも激しい怒りの毒を塗った矢を。

君の名は出さずにおこう、私の書物を汚さぬために。
私の詩によって生き残るに値いしない君の名で。

そのような恩恵を、不運な男よ、君は私から受けはすまい。

だがもし君の気違い沙汰がこれ以上続くなら
私はここから送ってやろう、鞭を、メガラを、
蛇を、しばり首の縄を、君に復讐するために。

ソネ 70

もしもピリトオスが地獄に降っていなかったなら、
テーセウスの友情も世に知られずに終ったろう。
ニーソスもその友情を死によって高めはしなかったろう、
もしも戦場にエウリュアロスの横たわるのを見なかったなら。

ピュラデスの名が語られることもなかったろう、
オレステスの狂気がなかったら。またピュティアスの誠実も
多くの書物によって世に伝わりはしなかったろう、
ダモンがその身代りをつとめることがなかったならば⁽¹⁾。

私もまた君のかくも変りやすい心を知らずにいたたらう、
もしも私の運命が転変定めなきものでなかったなら。
一体私に何ができよう、君に復讐するために。

君にあれと願う禍いは、いつの日か君を、
私と同じ立場において、ただもう少しうまいやり方で、
君の罪と私の誠実を思い知らせてやることだ。

註

- (1) ピュティアスはディオニュシオスによって死罪を宣告され、身辺の整理のためしばしの猶予を願い出た。この時友人のダモンが人質となることを申し出て、ピュティアスの戻らぬ時には身代りの死を承知したのである。ピュティアスが戻ったこと

は人々の賞讃を呼び、減刑を得ることができた。

ソネ 71

身の程知らずにも鎖帷子を着ているだけで
 第二のオルランドになったつもりでいる男、
 友人には横柄に構え、敵にはごまをする嘘つき、
 世慣れたふりをしているも益あることは何一つ言えぬ奴、
 あんな男を信じるな、ベローよ。いかにあの男が
 人をあざむき毅然たる様子を取りつくろっても、
 自慢たらしいおしやべりには信を置かぬ方がいい。
 あの手の輩を勇者のうちこれまで見たことはないのだから。
 ああいう手合いが話すことは目をかけられた自慢ばかり。
 己れの主人は馬鹿にする、認めてくれぬ人々には、
 自分の方からごまをする。おまけに貧欲に身はこがす、
 信心深いふりはしても、神も人道もあるものか。
 恋をしているとはいうものの、それも私が思うには、
 もっと大きな悪徳の疑いを外らすためだろう⁽¹⁾。

註

- (1) ディッキンソンはこの人物をカルロ・カラーファであるとしている。〔D. B. in Rome, p. 5〕「もっと大きな悪徳」についてはソネ103を参照。

ソネ 72

たとえギリシャの学問とローマの学問とを
 二つながらに見事己がものとしたところで、
 それでも（ゴオリ⁽¹⁾よ）ここには私の見たところ、
 まだまだ学ぶことがある、いかに多くを学んだ人にも。
 何もフランス人が丹念に集めている書物よりも、
 はるかに博学な書物がここに見つかるからではない。

我らの精神から最も地上的な最も重い部分を奪い取る
この上もなく軽いこの空気のせいなのだ。

いかなる神かは知らず、だがこの^{デーモン}地霊⁽²⁾はその聖なる火で
我らの最も不完全な部分を浄化し、試し、精錬し、
我らの判断力にやすりをかけてこの上なく鋭くしてくれる。

だがあまり長居をしていると、浄化され過ぎた精神の
なえ衰えた力が煙となって消えてしまう。
あまりに精神を研ぎ過ぎて刃まで失なうはめになる。

註

- (1) Jacques Gohory. パリ生れの作家。ティトゥス・リウィウス、マキアヴェリの
翻訳がある。また『ドン・キホーテ』のモデルでスペインの騎士道物語である『ガ
リアのアマデイス』の翻訳も。
(2) ローマの土地の守護神。

ソネ 73

ゴールドよ、悪徳に耽る老人には怖じ気をふるう。
若い者の盲目的な欲望を彼はまねているが、
歳月によってすでに冷たくなった彼の体は
無為の休息のうちに快く暮すことを求めているのだ。

だが何よりも私の恐れるのは野心ある若者が
自分を偉く見せようと隠者のまねをすることだ⁽¹⁾。
彼は偽善者の仮面で己れの裏切りを隠し、
よこしまな心をりっぱな外観の下に隠している。

実際（巷の諺にも言うように）
年寄りの山羊ほど汚ないものはなく、若い狼ほど
悪事に走りやすい者はない。この両者の本質を
つくづく眺めた上でより適切に言うならば
一方は汚ない豚のようにわが目に嫌悪を催させ、
他方は狡賢い狐のように警戒心をそそるのだ。

註

(1) これもカルロ・カラーファ。〔Dickinson, D, B, in Rome, p. 4〕

ソネ 74

デュベレーはお高く止まっていると君は言う。
友人達をもはや眼中に置いていないと。
ところが私は大領主でも公爵でも侯爵でも伯爵でもない。
それに私は身分も地位もこれまで変えたことがない。
今日に至るまで野心の何たるかを私は知らず、
偉くないからとこの身を恥じたこともない。
だから私の地位は上がりもしなければ下りもしない。
ただ己れの気質にのみ私は従っているのだから。
私は主人とどのように話をすべきかを知らず、
どのように機嫌を取るべきかも、まして当節の人のように、
お偉方の間でどう暮すべきかも私は知らぬ。
私はあらゆる人を敬まう。誰の機嫌も損ねはしない。
人に一たびお辞儀をされれば私は四たびお辞儀を返す。
私に敬意を払わぬ人には私の方でも敬意を払わぬ。

ソネ 75

デュ・ベレーがわが目よりも愛するゴールドよ、
見よ、自然によって我らが、顔の違うように、
風習も心ばえもいかに違ったものに作られたかを。
ある者を喜ばすことは他の者にはうとまれる。
思い上がった愚か者は見るのも厭だと君は言う。
己より低き者には強く出て己が利をはかり、
自分の話にうっとりしてむやみに言葉を飾り、
いかにも神々の寵児であると人には思わせる者が。

私の考えは君と反対だ。そしてその訳はこうなのだ。
 優しい物腰でいんぎんに私に語りかけてくる者は
 我にもなく私を阿諛迫従の徒にしてしまう。

ところが尊大な者とならそうした会話をせずにする。
 そういう者にはいささかもお返しすることはないのだから。
 彼には一人で好きなだけおしゃべりさせておくれた。

ソネ 76

人を賞めるよりけなす方が百層倍も楽しいものだ。
 けなす時には人は真実を語っているが、
 賞める時には相手の恩恵なり権威なりが
 心にもないことをしばしば書かせるものだから。

たとえ真実にせよ君は楽しく聞いたことがあるか、
 君主の讃歌を、あるいはどこかの町の讃歌を
 諷刺に巧みなマルクス・アウレリウス⁽¹⁾ の
 死ぬ程おかしい数々の言葉を聞くよりも。

それゆえ誰をも傷つけることなく
 当代の風俗を一般化して描くことが許されるなら、
 誰であれ読者よ、私を愚かとも賢明とも評するがいい。

だが私の思うには当節賢者とみなされているのは、
 その顔から仮面をはぎ取ってみれば、
 賢者とは似ても似つかぬ者なのだ。

註

- (1) これはローマ皇帝の名であるが、ここではイタリアの笑劇の道化役者を総称する名である。

ソネ 77

私はここに描こうとは思わぬ、

ローマの尊い僧侶の聖なる秘儀を。また何によらず、
 慎み深い処女が読むのを恥じるようなことも。

もっと人目につく悪徳に私は触れたいと思うのだ。

それでも君は言うだろう、これを哀惜と呼ぶのは当らぬと。
 大抵は滑稽な言葉をここに用いているからと。

それなら私は言おう、海は怒りに轟いてばかりは居ないと。

また日の神もギリシア人を射殺してばかりはいない⁽¹⁾ と。

たとえ君がここで何ほどかの笑いに会っても、
 アウソニアの岸にあってわが思いを託したこの詩を、
 偽りの嘆きとは呼んでくれ給うな。

私の洩らした嘆きは(ディリエよ)まことのものだ。

私が笑うとしても、それは人が食事の席で笑うようなもの。

なぜなら私は、いわばサルデーニヤの笑い⁽²⁾ を笑うのだから。

註

(1) これはプレイヤード派に好まれた表現でホラティウスに拠っている。《neque
 semper arcum tendit Apollo.》

(2) un riz Sardonien. risus sardonicus. 苦笑い。皮肉な笑い。サルデーニヤ産
 の植物(うまのあしがた)によってひきおこされると信じられたところから。

ソ ネ 78

私は君に語るまい、ポローニヤを、ヴェネツィアを、
 パドヴァを、フェラーラを、またミラノを、
 ナポリを、フィレンツェを。そして昨今では
 戦争と商業にはるかにすぐれた国々を。

私は君に語ろう、教会の聖なる座のことを。
 それは無為をその最も豊かな宝とし、
 また黄金の三重冠の誇りの下に
 野心と憎悪と偽りとを隠している。

君に告げよう、ここには幸運も不運も、

悪徳も美德も，快樂も苦悩も，
 名誉ある学問もまた無知もふんだんにあると。

つまりこうなのだ。かの太古の混沌⁽¹⁾のように、
 この世にありとあらゆる良きものと悪しきものが、
 (ペルティエ⁽²⁾よ)渾然としてここに存在しているのだ。

註

- (1) オウィディウスの『転身物語』の冒頭に描かれた太古の混沌。
 (2) Jacques Peletier du Mans (1517—1582). 詩人，数学者。デュ・ペレーのデ
 ビューにあたってはげましを与えた。

ソネ 79

私は恋を描かぬ。恋をしてはいないから。
 私は美を描かぬ。美しい恋人もいないから。
 私は優しさを描かぬ。粗暴さばかりを目にするから。
 私は快樂を描かぬ。私は苦しんでいるのだから。
 私は幸運を描かぬ。この身は不幸なのだから。
 私は寵遇を描かぬ。わが姫君には会えぬから。
 私は財宝を描かぬ。いかなる富も持たぬから。
 私は健康を描かぬ。身体が弱っているのだから。
 私は宮廷を描かぬ。わが陛下を遠く離れているのだから。
 私はフランスを描かぬ。異国に暮す身の上だから。
 私は名誉を描かぬ。ここにはそれがないのだから。
 私は友情を描かぬ。偽りばかりに出会うから。
 私は徳を描かぬ。それもまたここにはないのだから。
 私は知識を描かぬ。教会の人々の間で暮すのだから⁽¹⁾。

註

- (1) ここでもペトラルキストの技法を取り入れながら恋のテーマを最初に否定している。1555年教皇パウルス四世は新たに七人の枢機卿を任命した。この七人を前にして

行なった演説の中で教皇はさまざまな悪徳を斥けて美德を身につけ、無智を斥けて知識を身につけるべきことを説いている。〔Dickinson, D. B. in Rome, p. 85〕
このソネはこの教皇の演説と現実の聖職者達の墮落ぶり、無知ぶりとの隔たりを皮肉ったものである。

ソネ 80

宮殿に上って私の出会うものは、思い上りと、
包み隠した悪徳と、仰々しい儀式、
太鼓の響き、聞き慣れぬ諧調、
それに赤い法衣の尊大な姿ばかり。

銀行街に降りてみれば、ここには人垣と、
かき集められたニュースと天井知らずの高利、
追放された金持のフィレンツェ人の一団⁽²⁾ に、
哀れなシエナ人⁽³⁾ の涙を誘う喪の嘆き。

それより先へ進んでいけば、着いた所がどこであれ、
みだらなウェヌス達が大軍をなしている。
あちらこちらで恋の罫を仕掛けながら。

また更に足をのばして、新しいローマから
古いローマに入るなら、今や目にするものは
古い遺跡の大きな石の塊りばかり。

註

- (1) ヴァティカン宮殿。
- (2) カール五世と同盟を結んだコジモ・デ・メディチの支配に反抗したピエロ・ストロッチの一派は敗れてローマに亡命していた。ストロッチはフランス王妃カトリーヌ・ド・メディシスのいとこである。
- (3) シエナ市民は1552年6月スペイン人の支配に対して反乱を起しフランス軍を市内に入れた。その後アンリ二世は北方での戦いを取られてシエナを無視し、またモンモランシーの意見に傾いてシエナをなりゆきにまかせた。モンリュックの善戦で町はかろうじて守られていたが、1555年4月飢饉に苦しんだ市民はついに降服条約にサインした。モンリュックはシエナを去った。またこれに先立つ三月教皇ユリウス三世はシエナ問題で命を縮めたように世を去っている。

ソネ 81

見るも愉快だ（パスカルよ）すし詰め⁽¹⁾の教皇選挙会議は。
隣りあって並んでいる似たような部屋が
控えの間にもなり食堂にも台所にもなる。
十フィート四方のちっぽけな片隅でさえも。

見るも愉快だ、まわりを城壁でかためた宮殿の
中では聖なる群れ⁽²⁾が策を廻らせている。
ある者は野心から、ある者は取り入るために、
一人を失意に落して今一人が跪拝を受ける。

見るも愉快だ、外では町中が身支度調べ
教皇誕生せりと叫び、戦争のデマを流し、
宮殿を荒しにかかる⁽³⁾。だがそれにもまして愉快なのは、
ある者は一人の男を、他の者は別の男を賞めそやし、
ある者はこちらに賭け、他の者はあちらに賭けること、
一エキュ足らずで十人の枢機卿が売られることだ⁽⁴⁾。

註

(1) 1555年3月ユリウス三世の死後、清廉なマルケルス二世が即位して人々に期待を抱かせたがわずか二十一日の在位期間の後死去。これに続いて行なわれた選挙会議でパウルス四世（在位1555—1559）が誕生するのである。教皇選挙会議は規定に従ってヴァティカンの一角を板仕切りで区切って会場とし、この内部に枢機卿と随員ほか関係者が閉じ込められ外部との連絡を一切断って行なわれた。会場内は十二ないし十四フィート四方の小部屋に分けられ、番号の付された各小部屋はくじ引きによって枢機卿と随員に割りあてられた。食事を運び込むくぐり戸を除き全てのドアに門がかけられた上セメントで固められた。窓も上部の明り取り用のものを除いて鎧戸が下された。文書が持ち込まれまた持ち出されることのないよう番人によって荷物の出入りが監視された。しかし実際にはさまざまな方法で外部との連絡が取られ、世俗権力の圧力が加えられたのはいうまでもない。当選には三分の二の票が必要で、当選者が出るまで日に二回投票が行なわれた。新教皇が決まると他の枢機卿は彼に跪拝を捧げ、最年長者が聖ピエトロ広場に面した窓を開けてラテン語で教皇の誕生を告げた。（《Papam habemus》）〔Dickinson, D. B. in Rome, p. 78, 82〕

(2) troppe divine. 恋愛詩にあってはミューズを指す言葉である。

- (3) 新教皇となった枢機卿の小部屋は直ちに入ってきた人々によって掠奪される慣わしだった。
- (4) ディッキンソンによると、1559年パウルス四世の死後、六十三人の枢機卿の名が取引所に提示されて、一人三クラウンで一種の富くじが行なわれたという。〔D. B. in Rome, p. 152~153〕ここに描かれた1555年の場合も必ずしもデュ・ベレーの誇張とばかりはいえない。

ソ ネ 82

知りたいと言われるのか (デュティエ⁽¹⁾ よ) ローマがいかなるものか。
 ローマは誰にでも入場を許された栈敷であり、
 舞台であり劇場であり、およそ人間の行いで
 ここに欠けているものは一つもない。

ここには運命の戯れが見られる。彼女の手が
 高くまた低く我らを回転させるのが。
 ここには誰もが登場する。どんなに用心してみても、
 あるがままの姿でしか人に呼ばれることはない。

ここでは偽りの名声と真実の名声が駆け廻る。
 ここでは宮廷の人々が口説いたりおもねったり忙しい。
 ここでは野心と策略があり余る程潤沢だ。

ここでは自由が軽輩をも臆面もなくふるまわせ、
 ここでは無為が善良な者をも悪に染まらせる。
 ここでは卑しい人足が世界の大事を論じている。

註

- (1) Jean du Thier (Duthier), 枢密院顧問。国務長官。詩人達の熱心な保護者。

ソ ネ 83

考えてはならぬ (ロベルテ⁽¹⁾ よ) このローマが
 かってあれ程君の愛したローマだとは。
 ここではもうかつてのように人は掛売りをしていない。
 ここではもうかつてのように人は恋などしていない。

平和も良き時代ももはやここを治めてはいない。
 音楽と舞踏会は沈黙を強いられ、
 空気はよどみ、マルスが日常茶飯の事となった。
 また飢えも苦痛もそして不安も。
 職人は怠けて店を閉めてしまうし、
 怠惰な弁護士は依頼人を放っておくし、
 貧しい商人は乞食袋を提げている。
 目につくのは兵隊と、かぶとを載せた頭ばかり。
 聞えるのは太鼓の音とこれによく似たどよめきばかり。
 そしてローマは二度目の掠奪を毎日待っている⁽²⁾。

註

- (1) Florimond Robertet (1533—1569), シャルル八世, ルイ十二世, フランソア一世の下で財務長官を勤めたフロリモン・ロベルテの孫。1555年11月にローマに居たようである。
- (2) このソネの背景についてはソネ57の訳註参照。さらにその後の政治状況について補うならば, フランスとスペインの争いは, サン・カンタンにおいて, モンモランシー配下の仏軍とサヴォイア公配下の皇帝軍とが戦い, フランス側の大敗北という決着を見た(1557年8月10日)。この戦いでモンモランシーは捕虜となり, アンリはギュイーズ公をイタリアから呼び戻すことに決心する。当時アルバ公の軍がローマに迫っておりローマは大混乱の中にあった。市内ではあらゆる食料が欠乏し切符なしには手に入らなかった。フランス兵はカラーファの違約により何ヶ月も支払いを受けておらず, 武器さえも売り渡した後は戸口から戸口へと物乞いして歩く有様だった。8月26日夕刻ついにアルバ公の軍がローマの城門外に迫るとパニックは最高頂に達する。ローマでは1527年の「ローマの掠奪」sacco di Roma がなまなましく記憶によみがえるのだった。
 [Dickinson, D. B. in Rome, p. 131]

ソネ 84

記憶の娘達⁽¹⁾の御機嫌を我らは取り結んではない。
 苦悩を免れて生きている君達のように。
 それなら何をしているか君達が知らぬというのなら,
 次なる十行の詩が君達にそれを教えよう。

枢機卿に従って教皇の謁見に、枢機卿会議に、
 祈拝堂に、人を訪ねに、修道会にと出掛けていく。
 どこかの君主や国民に篤く敬意を表するために、
 誰それ大使の晴れの日に栄誉の華を添えてやる⁽²⁾。

護衛の列に加わって主君のお側に控えている。
 不意の客をも慣例のうやうやしきで出迎える。
 町の噂をあげつらい、いかにも世慣れたふりをする。

綺羅を飾ったラバで行き⁽³⁾、ラ・マルトやラ・ヴィクトワール⁽⁴⁾を
 家から家へと訪ねて廻り、ユダヤ人には借りを作る。
 これが、友人達よ、ローマの暇潰しというものだ。

註

- (1) ミューズ。
- (2) 各国大使を市門まで出迎え、教皇庁まで伴をするのも枢機卿の仕事だった。
- (3) 枢機卿の公式の外出は豪華な刺しゅうを施した被いを着せたラバに乗って行くことになっていた。
- (4) ローマの娼婦を指すと思われる。

ソ ネ 85

期限をのぼしてもらうために債権者にごまをすり、
 銀行家の機嫌を取り、見込みのありそうなことを言う。
 話す時にはフランスの闊達さもどこへやら、
 一語を答えるのに十五分はたっぷり考える。

飲み過ぎ食べ過ぎで体を損ねるようなことはせず、
 思惑なしには法外な費用をかけることもなく、
 自分の考えを誰にでも残らず打ち明けるようなまねもせず、
 中身の乏しいおしゃべりで外国人を釣っておく。

気質をよく呑み込んで誰が請求するかを悟り、
 自由な裁量に任されることが多ければ多い程、
 非難を招かぬよういっそう気を遣う。

誰とでもうまくやり、誰に対しても敬意を払う。

これが、愛するモレルよ、(赤面の至りだが)、
ローマで三年間私の学んだ全ての善なのだ。

ソネ 86

重々しい足取り、重々しい顔つきで歩き、
重々しい微笑をもって誰をも歓迎する。
あらゆる言葉の重みを計り、首を振って答える、
ノン・メジールいいえ貌下、とか、ワイ・メジールはい貌下、とか。
度々話の中に「して、それから」と一言はさみ、
ソフ・セルグイトーレ「仰せの通り」と答えて礼節の士を気取る。
自ら征服戦に加わりでもしたように
フィレンツェを語り、ナポリを語る。
誰をも殿様扱いして手の甲に口づけし、
ローマの廷臣のやり方にならって
豪華な服装で己れの貧しさを隠す。
これがこの宮廷の最も大いなる美徳なのだ。
ここから良い馬に乗り損ね体を損ね美服も着損ねて
ひげもなくし金もなくしてなくなくフランスに帰るのだ⁽¹⁾。

註

- (1) 最後の二行は次のように語呂合せになっている。!≪Dont souvent *mal* monté, *mal* sain, & *mal* vestu, / Sans barbe & sans argent on s'en retourne en France. ≫ ひげをなくすというのは性病にかかることを指している。ソネ93の訳註参照。

ソネ 87

何のせいなのか(モニーよ)ここから逃れようと
努めれば努める程ますますこの土地の守護神が
(神でなければ一体何でありえようか)
優しい力⁽¹⁾で我らをここにひき止めるのは。

これは心をそそる愛の誘惑、はたまた何か
別の毒ではあるまいか。ひとたびこれを飲むならば、
我らの精神が少しづつ我らから離れていき、
新しい樹皮の下で肉体が消え去っていくような。

私はここを離れたいと幾たびも望んだのだ。
だが私は感じている、私の髪が木の葉と変り、
私の腕が長い枝に、脚が木の根に変わっていくのを。

つまり私は今や一株の古い幹にすぎぬのだ。
そしてこの岸辺に移し変えられたのを嘆いている。
英国の桃金嬢ミルトがアルチャーナの岸辺で嘆くように⁽²⁾。

註

- (1) *douce force*. 恋愛詩を思わせる表現である。
(2) アリオストの『狂えるオルランド』の登場人物、英国人アストルフォは魔女アルチャーナによって桃金嬢に変えられてしまう。このモチーフがソネ86からソネ90までをつないでいる。

ソ ネ 88

誰が私のためにオデュッセウスの草根⁽¹⁾ を選んでくれようか。
また誰が私を危険から守ってくれようか、
永遠に悪徳の奴隷とするために

キルケが私を豚に変えてしまう危険から。

誰が私の手にメリッサの指輪⁽³⁾をはめてくれようか、
今一人のルッジェロとして私を呪いから守るために。
またいかなるヘルメースが私を旅立たせてくれようか、⁽⁴⁾
愛の隷従に時を失なうのを避けるために。

誰がああ声を聞かずにすむようにしてくれようか、
アケロオスの怪物ども⁽⁵⁾ の偽った優しさを。
誰が私のために貪欲なハルピュイアを追い払ってくれようか、
私をねらって再び空に舞い上るだろうあの鳥達⁽⁶⁾ を。

私を正気に戻し私に目を返してくれるために⁽⁷⁾。

誰がしてくれよう、平和にわが肉を食べられるように。

註

- (1) キルケの魔法から守るためにヘルメースがオデュッセウスに与えた薬草モリュ。
- (2) これはローマの娼婦の誘惑をほのめかしたもの。
- (3) 『狂えるオルランド』の登場人物ルッジェロにメリッサが与えた魔よけの指輪。
- (4) デイドの許に長居をしているアエネイアースに旅立ちを勧めたのもヘルメースである。
- (5) アケロオス河神の娘，セイレーン。
- (6) 息子を盲目にした罪で自ら盲目にされ，また怪鳥ハルピュイアによって食物を汚される罰を受けたピーネウスを救い鳥を追い払ったのはカライスとゼーテースである。
- (7) 正気に戻り，目を返してもらおうというのは娼婦への迷いから覚めることを指している。次のソネ参照。

ソネ 89

ゴールドよ，思うに私は目を覚ましたのだ。

ちょうど恐ろしい夢を見てはっと目を覚まし，
こんなものにも長く眠っていたのかと驚きながら
寝台の上にながながと身を伸ばす人のように。

ルッジェロも（思うに）このように驚いたのだ。

私を悩ますこの羞恥の念も恐らくは
彼を盲いにした魔女の化粧の
偽りを悟った時の彼と同じに違いない。

だからまた彼と同様に私も生き方を改めよう。
今より後はロジスティラの胸に生きるために。
彼女こそは悩める心の共通の支えなのだから⁽¹⁾。

いざ（ゴールドよ）いざ，帆を上げよ，權を取れ⁽²⁾。
逃げよう，沖に出よう，私には見える，美しい貴婦人が
幸運の兆を現わして我らをその港に招くのが。

註

- (1) ルッジェロは魔法の化粧に目を眩まされ魔女アルチャーナへの恋に落ちるが、ついには魔力から解放されて清純なロジスティラの許に旅立つ。ここでデュ・ベレーは彼自身の娼婦との恋愛事件をほのめかしているようである。
- (2) この語句はキケロに拠っている。《remis velisque》〔Cicero, Disputationes Tusculanae, III, II, 25〕

ソネ 90

考え給うな (ブジュ⁽¹⁾ よ)ラテンのニンフ達が
卑屈な馴れ馴れしきで己の裏切りを隠し、
その顔を偽りの美しさで被い隠しているために、
わがアンジューのニンフ達を私に忘れさせたなどとは。
アンジューの優しさ、神々しいその言葉、
みだらさのいささかもないその衣服、
その優雅、その若さ、その素朴さこそが
私に (ブジュよ) 年取ったアルチャーナ達⁽²⁾ を嫌わせるのだ。
彼女らの上べを見ればこれ程美しいものもまたあるまい。
だがその内側は墓の内側にも似ている。
我らの裡にはこれ以上に恥ずべきものは見当らぬ。
おお何という貧欲、何という貧しさ。
その汚らわしさを見ることの、おお何という恐ろしさ。
確かに彼女らを見ることは若い男には薬だろう⁽³⁾。

註

- (1) Jacques Bouju (1515—1577). デュ・ベレーと同じアンジュー出身者。
- (2) ローマの娼婦。
- (3) これはテレンティウスから来ている。《nosse haec omnia salus est adolescentulis.》〔Terentius, Eunuchus, V, 4, 18〕

ソネ 91

おお愛らしく巻いている麗しの銀の髪よ。

おお小波立つ晴れやかな額よ、そして汝金色の顔よ。

おお麗しの水晶の瞳^めよ、おお尊い大きな口よ。

巾広の皺となって両端にまくれ上るその口よ。

おお麗しの黒檀の歯よ、おお世にも稀なる宝物よ。

ひとたび笑えば全ての魂が虜となるその歯よ。

おお幾重にもひだをなすダマスコ織りの喉よ。

かくも美しい体にふさわしい汝ら大いなる麗しの乳房よ。

おお麗しの金の爪よ。おお短くぼってりした手よ。

えもいわれぬ腿よ。そして汝ら太めの脚よ。

また礼儀上口に出しては言えぬものよ。

おお透明な麗しの体よ。おお氷の四肢よ。

おお神々しい美女よ。どうか私を許し給え。

たとえ人間の身である私が汝を愛さぬとしても⁽¹⁾。

註

- (1) ペトルルカ風恋愛詩におなじみの形容語を対象をすりかえて用いている。この種の戯れはすでにマロも試みている。

ソネ 92

髪を縮らせて幾重にも波うたせ、
眉をつまみ上げ、選りぬきの香水を
虫食いの肉体に上から下までふりかけ、
紅白粉で顔を別人のように作り変える。

夜ともなれば仮面を着けて出掛け、仮面を着けて語らい、
何かにつけて恋に落ちたそぶりを見せ、
一晩中鎧戸越しに口笛を吹き鳴らし、
一人の嫉妬をあおっては別の男を有頂天にする。

踊り、歌い、演奏し、寝床ではしゃぎ、
大抵は口の中に二枚の舌を持っている。

これが娼婦達のおきまりのやり口だ。

だが私がこんなことを教える必要があるだろうか。

もしも君が知りたければ（ゴールドよ）そしてもしも

これ以上のことを知りたければシャセーニュ⁽¹⁾ に聞くがいい。

註

- (1) Chassaigne. あるいは娼婦の名か。（Droz は別の人物ラ・シャセーニュ氏をあげている。）

ソ ネ 93

優しき愛の母神よ、放縦なキュプロスの女神⁽¹⁾ よ。

汝はいかなる力をも汝の力の下に置く。

また汝はクサントスの岸边からこの異郷の岸边へと

汝の庇護するダルダニアの人々を息子と共に導いた⁽²⁾。

もしも私がフランスに帰れるなら、おおいダリアの母⁽³⁾ よ、

ここに来た時と変りなく、私の古い皮膚が

別の皮膚に変り、わがフランスのひげが

イタリアのひげに変わる⁽⁴⁾ 危険にも会わずに帰れるなら、

ここから私は汝の祭壇に捧げよう、

百合でもなく、不滅の鶏頭でもなく、

汝の血の色を今もとどめるあの花⁽⁵⁾ でもなく、

私のあごの最もまばゆい金色のひげを。

金羊毛の獲物を持ち帰ったイアソンよりも、

りっぱな手柄⁽⁶⁾ を立てたことを一人誇りながら。

註

- (1), (3) ウェヌス。

- (2) ウェヌスは息子アエネイアースと共にトロイアの人々をラティウムの岸边まで導いた。トロイアにはクサントス（スカマンドロス）河が流れている。

- (4) 性病による脱毛症を指している。

- (5) 薔薇の花。アドニスの死を悼むウェヌスの涙（血ではなく）から薔薇が生まれた。薔薇も百合もウェヌスに捧げられた花である。

- (6) ローマで三年も暮しながら娼婦から性病をうつされなかったことを自ら手柄としている。次のソネ参照。

ソネ 94

幸いなるかな，長い年月戦を続けながら
死にも負傷にも長き虜囚の憂き目にも会わぬ人は。
幸いなるかな，長い間わが家を離れて暮しながら，
家を傾けもせず，土地を売ることもない人は。

幸いなるかな，宮廷で何がしかの寵を得ながら，
妬みも裏切りも恐れることのない人は。

幸いなるかな，長い年月を毒殺の危険もなく過ごし，
赤い帽子を，また聖ペテロの鍵を楽しむ人は，

幸いなるかな，危難にも会わず海を度々渡る人は。

幸いなるかな，訴訟沙汰もなく法廷に出入りをする人は。

幸いなるかな，病もなく人の一生を全うする人は。

幸いなるかな，不安もなく己が財産を守り，
疑うこともなくわが妻を守る人は。まして幸いなるかな，
皮をむかれることもなくローマで三年も過ごした人は⁽¹⁾。

註

- (1) マニーもその作品の中で，人の予期に反して無事なひげをフランスに持ち帰ったことを自ら徳としている。〔*Soupirs*, no. 160〕

ソネ 95

呪われよ幾たびも，リビュアの片目男⁽¹⁾よ。
彼こそは岩の真ん中を貫いて
アルプスの天然の要塞を落し，
フランスからイタリアへと道を開いたのだ。

思えばマルスも永遠の妬みでスペイン人の心を
毒することはなかったろうに。またフランスの兵達も

多くの富める人々も危険を冒しはしなかったろうに、
ここへ来て名誉も生命も失う危険を。

フランス人が外国渡りの悪徳に染まり、
言葉や服装を変えることを学ぶこともなく、
己が風習を似もつかぬものに変えることもなかったろう。

皮のむける病いに苦しむようなこともなく、
わが名を梅毒の呼び名とする⁽²⁾ こともなかったろう。
またかくもしばしば水牛を乗り物とする⁽³⁾ こともなかったろう。

註

- (1) ハンニバル。
 (2) アメリカの風土病であった梅毒はコロンブス探険隊によってスペインやイタリアに持ち込まれたといわれている。1497年仏王シャルル八世のイタリア遠征の折イタリアに入ったフランス兵や外国の傭兵がうつされ、イタリアで名高い娼婦の制度によってたちまち拡がった。フランス病 *mal francais* とナポリ病 *mal napolitain* とスペイン病 *mal espagnol* と呼ばれる。
 (3) 次のソネの訳註参照。

ソ ネ 96

おお女神⁽¹⁾ よ、言葉一つが財産の哀れな乞食を
 汝は王侯にも並ぶ者とすることができる。
 また偉大な王を学校教師とすることも。
 その地位を下げるのが汝の心に適いさえすれば。
 私は汝に祈りはしない、この身を転じて、
 寵遇に恵まれたあのお偉方にまじることも、
 世の語り草となり、わが名声が天翔けることも。
 かの偉大な君主達を汝が天翔けさせたその翼で。
 そうした数々の願い事を私は持たぬ、
 それらが全て汝の権能の裡にありはしても。
 そうした願いをこれまでも私は抱いたことはない。
 願うのはただわが財産が他人に食い潰されぬこと、

そして遠からず為替手形を手に入れることだ。
水牛に乗ってここを発つ⁽²⁾ ようなはめにならぬために。

註

- (1) 運命の女神。
(2) このソネの内容から、これはローマにおいて借金を返せぬ債務者に課せられた刑のようである。

ソネ 97

ドゥルサン⁽¹⁾ よ、体に悪魔の憑いた、またはそう見える娘達が
ぞっとする身振りで体や頭を動かし、
老いたシビュラがすると伝えられるそのこと⁽²⁾ を
彼女らもまたするのを度々目にすると、

この上もなく屈強な者も非力を悟らされ、
狂暴な力に打ち勝とうと空しく努めるのを見ると、
また君の分野⁽³⁾ で最も巧みと言われた人々も
持てる知識を残らず失ってしまうのを見ると、
彼女らが恐ろしい叫び声を上げるのを聞き、
彼女らの白眼がひっくり返るのを見ると、
私は全身の毛が逆立ち、もはや言うべき言葉もない。

だが一人の坊主が口にラテン語を唱えながら
彼女らの腹や乳房を上にな下に撫でさする⁽⁴⁾ のを見ると、
さしもの恐怖も消え失せて私は笑わずにはいられない。

註

- (1) Rémy Doulcin. 聖職者で医者。
(2) 予言に先立ってシビュラが陥る痙攣状態。
(3) 医業。
(4) この療法は実際ローマでしばしば行なわれたものであるという。

ソネ 98

一体なぜなのか、ローマではかくも度々

娘達が狂ってしまうのは。しかもそのほとんどが、
年端もいかず（ロンサールよ）まだ少女の年頃なのに、
きまって同じ修道院で⁽¹⁾ 気が狂ってしまうのは。

誰が彼女らの声を借りて語るのか。いかなる神が
知らぬ人には返事をするなど彼女らに命ずるのか。
また彼女らが息でろうそくを吹き消した途端に
そうした状態が消え失せる⁽²⁾ のはなぜなのか。

聖なる地にかかる錯乱がふえているのはなぜなのか。
なぜまたかくも多くの霊がたった一人を苦しめるのか。
なぜあの霊は出ていくのに他の霊は残るのか。

教えてくれ（ロンサールよ）君は霊の本質を知っているから⁽³⁾。
かくも哀れな人々を苦しめているこの霊とは
いと高き霊なのか、中位か、それともいと卑しき霊なのか。

註

(1) ジャン・ボダンによれば1554年に、ジャン・ヴィエールによれば1555年に、ローマの孤児収容所に居た全ての少女又は婦人が悪魔に憑かれたという。(J. Bodin, *Démonomanie*, éd. de, 1604, p. 398) 彼女達に対してサン・ブノワの修道僧が悪魔払いを試みたが6か月たってもはかばかしい効果をあげ得なかった。

H. ヴェベールの註参照。

(2) ディッキンソンは1515年に衣服商ルザージュの見た例として、四人もの悪霊に憑かれた女を僧侶が払い浄める話をあげている。僧侶が霊達に出ていくよう命ずると、霊達は各々出ていく時に僧侶の手にしたろうそくを吹き消したという。(D. B. in *Rome*, p. 69)

(3) ロンサールの『讚歌集』の中に『鬼神への讚歌』がある。すでにソネ60に言及されている。

ソネ 99

町を歩けばかくも多くの人々があふれている。
司祭あり、司教あり、修道士あり、かと思えば
銀行家あり、職人あり。ところがパリで見るように、

町をそぞろ歩く女達はついぞ見かけたことがない。

世界を呑み込んだ洪水の後で（私が思うには）
ピュラはここには彼女の石を投げなかったに違いない。
あるいはむしろ思われる、この人々を眺めていると、
神が世界の半分しか作り給わなかったのだと。

なぜなら足取りも重々しいローマの貴婦人達、
参事会員の妻や商人の妻のような人々は、
散歩などすることはなく、ここで見かける女達は
宮廷の名からその名誉ある名を取った女ばかり。
だから時々心配になる、私がフランスに帰った時、
出会う女がことごとくこの女達のように見えはせぬかと。

註

- (1) ローマの一般市民は滅多に妻を外出させなかった。通りを公然と歩いているのは娼婦である。

ソネ 100

ユルサン⁽¹⁾よ、ローマの人々があの古来の名前で、
インドからモールまで鳴り響いたりっぱな名前で、
偉大な人々のみならず最も卑しい人々までも、
また手にまめを作る者までも呼ばれる⁽²⁾のを聞くと、
かくも名声高く、世界が挙って讃える名前で
こうした卑しい輩が呼ばれるのを聞くと腹が立つ。
唯一私の讃える名前、^{クレテイアン}篤信家の名がなかったならば、
我らが聖人達をこそこうした名前で呼びたいものを。

とりわけわが名は忌々しく、ギョームの名も腹立たしい。
その他数々のこの国にごくありふれた名前にしても。
不当にも多くの下司どもがギリシアやローマの
りっぱな名前を持っているのを見るにつけても。
だが何にもまして（ユルサンよ）口惜しいのは、

タイースがルクレツィアの名を持つことだ⁽³⁾。

註

- (1) Charles Juvenal des Ursins, デュ・ベレー枢機卿の司教総代理。枢機卿の家の礼拝堂付司祭。この人物を Paolo Giordano Orsini とする説もある。(Droz.)
 (2) 古来のローマの名前, マリウス, スキープオー, フルウィウスなどはローマでは庶民の間でよく見られる名前となっていた。
 (3) 当時の有名な娼婦のうちに Lucrezia Portia という者がいた。ルクレツィアは貞節のシンボルともいうべき名である。このソネと同じ趣向のものとして、教皇アレクサンデル六世の娘ルクレツィア・ボルジアを歌ったポントーノ^{バスクイナータ}作の諷刺詩がある。「この墓に眠れる者の名はルクレツィア,されど内実はアレクサンドロスの娘,許婚者,若妻なるタイース。」(娼婦タイースはアレクサンダー大王の愛人であった)。

ソネ 101

何と言うべきか(メラン⁽¹⁾よ)このローマの宮廷を。

ここでは誰もがありとあらゆる事をしている。

最も卑しい者でさえ最高の榮譽にありつける,

悪徳により, 美德により, 苦勞の末に, あるいは楽々と。

ある者は出世のために空しく出費をかさね,

他の者は同じ手段で首尾よくお偉方になる。

ある者は厳しさでその地位を保ち,

他の者は優しさで人の心を掴む。

ある者は出世すまいとして出世のやむなきに至り,

他の者は出世を望んで左遷の憂き目に会う。

ある者に害あることが他の者には益となるのだ。

知識こそ名譽への道と言う者があれば,

無知こそ幸運を招くと言う者がある。

一体どちらが(メランよ)一番もつともな説だろう。

註

- (1) Melin de Saint-Gelais (1491—1558). マロと並んでプレイヤー派以前にもてはやされた宮廷詩人。一時プレイヤー派と敵対していたがその後和解した。

ソネ 102

ヘルメースの像はどの木からも出来るわけではない⁽¹⁾と、
古い諺は教えている。だがここではどの木からも、
教皇が出来上り、また枢機卿が出来上る。
三日のうちに来るで別人の姿となるのだ。

諸侯も国王も偉大な者として世に生まれ、
自らの偉大さにさほど心を砕きはしない。
己が偉大さを崇めさせようと、そればかりに余念のない
この新しい神々のようには。それも長続きはしないのに。

パスカルよ、私は見たのだ、かって全ローマを
己が後ろに従えた男を。その時彼は
三人の従者を連れて町を歩いていくところだった。

また連綿たるローマの誇りを後ろに従えた男も見たが、
その男の父親は手にまめをこしらえ、
突棒を握り鋤の上に身を屈めている。

註

- (1) この諺はラブレールも引用している。(第四の書第62章)

ソネ 103

もしもかつて汝の兄弟⁽¹⁾の死が、汝の母⁽²⁾の涙が、
もしもかつて汝の肉親への哀惜が、
むごいアモルよ、いかに愛を知らぬ汝だとて、
人々の苦い涙を汝に味わわせたことがあるのなら、

今こそ汝の松明の火を消さねばならぬ。
今こそ汝の箠から矢を残らず捨てねばならぬ。
今こそ汝の小さなトルコ弓を折らねばならぬ。
汝の最初の喪を今こそ新たに思いおこして。

なぜならここでは美貌のアスカニオの父親⁽³⁾ を
悼んではならぬからだ。その代り美貌のアスカニオその人を
悼まねばならぬ。アスカニオよ、おお何という悲運。

アスカニオよ、カラーファ⁽⁴⁾ がその目よりも愛した者よ。
アスカニオよ、顔の美しさでははるかに優る者よ、
神々に酒を注ぐトロイアの美貌の酌人⁽⁵⁾ よりも。

註

- (1) ウェヌスの息子アエネイアース。
- (2) ウェヌス。
- (3) アエネイアース。彼にもアスカニオスという息子がいる。
- (4) 枢機卿カルロ・カラーファ。
- (5) ガニュメデス。